

共同研究の経過と概要

平川 南

【目的】

この研究の目的は、自然環境の営みと脅威が人間生活にどのような影響を与えてきたか、また人間が環境の改変を通じてどのような環境問題に直面し、歴史的にいかに対処してきたかなど、日本列島における自然環境と人間生活との関係を歴史的に明らかにしようとするところにある。

本研究では、第I期の成果を踏まえて、日本列島内の自然環境の変化と人々の対応、さらに人の作り出す二次的な環境から派生する資源問題・生業問題・人口問題、そして都市における火災・疫病・廃棄物などの開発に伴う様々な環境問題について日本歴史のなかで究明する。

具体的には、中世鎌倉の都市形成および近世江戸の都市形成と環境問題、特に環境問題と深く関わる消費の問題を物に即した形で十分に考察しながら、周辺の生態系の変容や人間の生業活動の実態をも含めて研究を推進する。フィールドは鎌倉と江戸を中心としながらも、周辺の関連するフィールドを広範囲に取り上げて、前近代における都市形成と環境問題を多角的に分析する方針である。

共同研究員（2000年度当時）

氏名	所属・職	専門分野	分担課題
北原糸子	東洋大学社会学部 非常勤講師	近世史	近世の災害史
金田章裕	京都大学大学院文学研究科 教授	歴史地理学	開発と歴史地理学
久保純子	中央学院大学商学部 助教授	地理学	中近世の地形形成
小林忠雄	東京家政学院大学人文学部 教授	民俗学	都市民俗
齋木秀雄	鎌倉考古学研究所	中世考古学	中世都市考古学
谷川章雄	早稲田大学人間科学部 教授	近世考古学	近世都市考古学
林 謙作	北海道大学文学部 教授	考古学	開発と考古学
原田信男	札幌大学女子短期大学部 教授	中世史	都市と村落景観
福島金治	愛知学院大学文学部 教授	中世史	中世生活史
南木睦彦（98年）	流通科学大学商学部 教授	環境史	植物民俗学
斎藤直子（99年～）	川村学園女子大学文学部 助手	中世史	中世都市と地形
盛本昌広	元慶應義塾大学文学部 非常勤講師	中世史	中世都市史
義江彰夫	東京大学大学院総合文化研究科 教授	古代中世史	都市と信仰
青山宏夫	本館歴史研究部 助教授	歴史地理学	歴史地理学的考察
井原今朝男	本館歴史研究部 教授	中世史	都市周辺の歴史的考察
岩淵令治	本館歴史研究部 助手	近世史	近世都市と災害・開発

小野正敏	本館考古研究部 助教授	考古学	中世考古学
坂本 稔	本館情報資料研究部 助手	地球科学	火山災害
高橋一樹	本館歴史研究部 助手	中世史	中世都市と村落
辻 誠一郎	本館歴史研究部 助教授	環境史学	人と自然のかかわり史
西本豊弘	本館考古研究部 教授	考古学	動物考古学
*平川 南	本館歴史研究部 教授	古代史	古代都市と災害・開発
計 22 名	(内部 9名・外部 13名)		*は研究代表者

研究協力者

1998年度

大河内 勉	鎌倉考古学研究所	玉林美男	鎌倉市教育委員会
斎藤直子	川村学園女子大学	山村亜希	京都大学大学院生

1999年度

赤沢春彦	新宿区環状2号線遺跡調査団	谷口 榮	葛飾区郷土と天文の博物館
上本進二	鎌倉県立七里浜高等学校	南出眞助	追手門学院大学
金子 智	千代田区教育委員会	美濃部達也	新宿区環状2号線遺跡調査団
後藤宏樹	千代田区教育委員会	村石眞澄	山梨県埋蔵文化財センター

2000年度

中三川 昇	横須賀市教育委員会	本沢慎輔	平泉町文化財センター
羽柴直人	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター		

【経過と成果】

1998年度

[経過]

- 第1回研究会(1998年7月13日) 国立歴史民俗博物館
研究方針と研究報告に関する全体討議
- 第2回研究会(1998年9月12日) 国立歴史民俗博物館
齋木秀雄 「遺跡と遺物からみる鎌倉」
盛本昌広 「中世鎌倉における材木の需要と供給」
斎藤直子 「中世都市鎌倉における海岸地帯の変容」
- 第3回研究会(1998年12月12日・13日) 鎌倉市・鎌倉市役所
現地調査 鎌倉市内, 及び以下の報告
福島金治 「災害からみた鎌倉の町」
大河内勉 「中世都市鎌倉の石材」
玉林美男 「中世都市鎌倉の河川」

第4回研究会（1999年3月14日） 国立歴史民俗博物館

山村亜希 「中世都市空間構造」

谷川章雄 「近世江戸の発掘調査成果」

久保純子 「東京低地」

[成果]

初年度の研究計画は列島内の都市形成と環境の変化に重点を置いて設定された。第1回目の研究会において、共同研究員全員による本研究に対する意見交換を行い、本研究計画案に若干の修正を加えた上で承認した。初年度は中世鎌倉の都市形成と環境変化について研究会と現地調査を実施し、その概要を全員で確認することができた。特に鎌倉の都市づくりと地形の問題を、近年の鎌倉の発掘調査成果に焦点をあてて研究報告と現地調査で研究を深めることができた。

特定のフィールドを設定した研究計画は、従来からの資料データおよび十分な研究蓄積が必要であり、そのうえに関係諸機関の全面的協力が不可欠である。この点については、共同研究員のメンバー選定に十分に配慮したこと、関係諸機関の協力を得ることが確認できたことで、研究を推進する見通しが一応立ったといえよう。また、研究会の運営なども、共同研究員の均等な責任分担による運営方針を確認した。

1999年度

[経過]

第1回研究会（1999年7月10日） 足立区立郷土博物館、葛飾区郷土と天文の博物館

現地調査 足立区、葛飾区内、及び以下の報告

村石眞澄「毛長川周辺の地形環境」

谷口 榮「川からみた葛飾の歴史」

第2回研究会（1999年12月11日・12日） 鎌倉市役所

現地調査 鎌倉市内

南出眞助「歴史地理学からみた中世港湾の立地条件」

上本進二「鎌倉の地形発達史」

第3回研究会（2000年3月18日・19日） 新宿区、千代田区立九段社会教育会館

現地調査 新宿区内遺跡

後藤宏樹「都市江戸の開発」

北原糸子・美濃部達也・赤沢春彦「17世紀における都市開発と江戸の町」

金子 智「岩本町2丁目遺跡の調査概要」

[成果]

1999年度は、前近代における鎌倉および江戸の都市形成と環境変化に関して大きな研究成果を得た。古代の鎌倉郡家およびその付属施設は、海岸部近くに占地し、港湾を利用した流通の要地として開発されたことが近年の発掘調査で明らかとなった。その開発を前提として、中世鎌倉は、さらに切

通や谷戸などを大規模に地形改変して都市を形成していった。現地調査は、関係機関の調査員の方々と合同で実施し、武士の屋敷地や寺院造営に伴う台地の削平と整地地業が予想以上の規模で実施されている実態を掌握することができた。さらに、河川の流路や海岸線の変化などの様々な自然環境が中世都市形成と密接に関わっている点が明確になってきた。

江戸については、まず東京低地地域の歴史時代の地形・海岸線の変化などの環境変化を掌握した。近世都市江戸についても、すでに調査の終了した岩本町2丁目遺跡や溜池遺跡などの調査成果報告と四谷1丁目遺跡、飯田町遺跡などは、調査中の現場を実見することができた。こうした調査を通して、低地の屋敷地では武家地・町地を問わず、低湿地に対応した大規模な造営工事を実施しており、基礎地業と地下倉や庭園などの付属施設も含めてこれまでの文献史料や絵図等ではうかがい知れない都市開発のすさまじさを認識することができた。

以上のような鎌倉や江戸を対象としたフィールド調査において、外部共同研究員および関係機関の全面的な協力によって大きな成果を得ることができた。国立歴史民俗博物館としても、調査や研究発表を現地で実施し、関係諸機関と成果を共有できるように心がけた。この2年間で、当初の研究目的とした都市形成と環境変化を解読しうる基礎的資料の概要を把握できたので、最終年度には周辺の関連するフィールドとの比較研究も加えて、総括的研究を推進することとした。

2000年度

[経過]

第1回研究会（2000年7月1日・2日） 逗子市立図書館

現地調査 鎌倉市内、逗子市内

高橋一樹「中世鎌倉の地震について」

中三川昇「横須賀の開発について」

第2回研究会（2000年10月14日・15日） 柳之御所資料館、平泉郷土資料館

現地調査 平泉町内

羽柴直人「平泉遺跡群の調査成果」

本沢慎輔「12世紀の造成工事」

辻誠一郎「東北日本における古代の自然災害の影響」

第3回研究会（2001年3月17日・18日） 国立歴史民俗博物館

研究総括と研究報告に関する討議

[成果]

- (1) 鎌倉における地震や火災などの被害状況を文献史料から確認する基礎的作業と、災害関係史料からみた中世鎌倉の開発状況を具体的に検討し、例えば谷々における宅地開発や幕府関係の寺院の建設が積極的に実施されるが、災害（とくに地震）時には、大きな被害を受けていることがあきらかとなった。
- (2) 逗子市・葉山町にまたがる長柄・桜山第1・2号墳の発見によって、三浦半島から東京湾を渡り房総半島へ達するいわゆる古東海道ルートが鮮明となり、東国の武家政権の本拠地が鎌倉に置かれ

たことも、古墳時代初期以降この地域が果たした畿内と東国を結ぶ要衝の地であったことを前提としてしていると想定できるようになった。

- (3) 鎌倉周辺の横須賀市域においても、12世紀後半～15世紀は安定した砂堆上に遺跡が形成されるが、それは三浦氏主導の港湾的地域として開発され、漁業が活発化するのも鎌倉への供給によるものと考えられる。また、継続的な樹木伐採も鎌倉への供給によるもので、林層が二葉松類主体の植生に変化していることが確認された。
- (4) 鎌倉との比較都市として平泉の調査を実施した。平泉の発掘調査成果によれば、台地と丘陵端部に遺跡群が分布し、地形の起伏を最大限利用しながら社寺や館・屋敷遺構がつくられている。各遺跡は、基本的には高所を削り、低地に土を盛る地業で、斜面地には切り土盛り土を行って敷地を拡張し、土塁堀あるいは溝で遺跡の周辺を区画し、池を掘削して導水路と排水路を設け、沢を埋めて生活面を広くしている。
- (5) 東北北部から北海道にかけては、10世紀代に十和田の火山灰（915年）と渤海の白頭山の火山灰（946年）の二つの降下で植生が一変している。平泉においても、十和田-aの火山灰が1メートル以上の厚さで二次的に堆積している状況を実見し、平泉の都市づくりにも影響を与えたと考えられる。

以上のように、2000年度は最終年度にあたり、中世都市鎌倉の周辺状況と平泉のような比較検討がほぼ計画どおり実施でき、大きな成果を得ることができた。最終の研究会では共同研究員全員が本研究に対する各自のまとめと研究報告書に向けての構想を発表し、全体討議をもってまとめとした。

【本研究のまとめ】

本研究は前近代の都市における、自然環境の変容や災害と、都市計画に基づく開発との関連を中心的な視点として、フィールド調査による実証的研究を推進した。

まず、中世都市鎌倉、および比較検討のためにとりあげた奥州藤原氏の平泉の都市づくりにおいて、海岸線および河道変遷などの自然環境の変動が大きく影響を与えた点を明らかにすることができた。また、我々の予測以上に、鎌倉の都市づくりにあたっては、地形改変（谷部の埋め立てや大規模な整地事業など）が行われていることも鮮明となった。さらに中世鎌倉の都市計画は古墳時代以来確立されてきた古東海道ルートが重要な前提条件となっていたことと、鎌倉の都市づくりは周辺（横須賀など）の生業活動や植生などの環境変化をもたらしたことなど、その周辺状況をも明確にすることができたことは、大きな研究成果といえる。

一方、江戸の都市開発において大きな事業のひとつは外堀普請である。江戸城外堀という城郭の総構の建設が、その周辺の市街化に大きな役割を果たした。また江戸の景観・環境問題に関する研究は、溜池遺跡の発掘調査によって大きく進展した。溜池は江戸城外堀の一部をなしており、江戸城の南側の台地を樹枝状に浸食する谷を利用してつくられたが、人為的な環境の改変を伴うものであった。17世紀後半の溜池沿岸の低地の開発による活発な土地利用によって、自然科学分析の結果、著しい水質汚染が認められた。さらに、都市の開発と共に、膨大なゴミの堆積が深刻な社会問題となった。しかし、悪化した環境を改善するためにゴミ処理と下水という都市施設が整備されていった。度重なる火

災や地震などの災害によって、都市は大きな被害を受けその後の新しい都市計画に基づいた再開発が行われ、消費生活が促進され、土地の利用状況も著しく変化する。いわば、災害が都市施設の整備やあらたな開発を加速させ、都市の景観や環境を大きく変えていったとも捉えられるのである。しかし、江戸については広範な発掘調査が実施され、膨大な資料と分析データが蓄積されているが、短期間の研究ではそれらの資料を十分に把握することができず、本研究グループとして独自の研究を展開するまでにはいたらなかった。

以上により、「日本歴史における災害と開発」というテーマのもとに、第Ⅰ期・第Ⅱ期の研究を通じて次の諸点を明らかにすることができた。主として、①善光寺平および鎌倉、江戸において、自然環境の変動や都市災害などが地域支配や都市形成などにきわめて大きな影響を及ぼしたこと、②地域支配の拠点や都市形成過程における地形改変や、地方や都市社会の構造変化が、その拠点や都市内部のみでなく周辺の生業形態や自然環境をも変容させていること、などを解明できたといえよう。

これらの具体的事象は、近年の飛躍的な考古学や地質学、動植物学などの自然科学の成果に基づき、文献史料の再検討により解明することが可能となったのである。その意味において、第Ⅰ期・第Ⅱ期の本館の基幹研究は各地の調査機関や研究者の多大な成果と協力に支えられて推進できた点をあらためて強調しておきたい。これまで歴史学が人間とその社会的関係のみを主な対象としてあつかい、自然との関係を重視してこなかった傾向に対して、日本の歴史における自然と人間との交渉史についてフィールドワークに基づき、多くの課題を残しながらも、具体的・実証的に実像を一応描くことができたのではないかと考えている。

(国立歴史民俗博物館歴史研究部)